
かつおぶしは厚めに削れ

koma shun

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かつおぶしは厚めに削れ

【Nコード】

N8708T

【作者名】

k o m a s h u n

【あらすじ】

「おれのお母さんのお好み焼きはそうだったから、かつおぶしは厚めに削れ」。旦那（立嶋直志）の言葉を信じた嫁は、ネットオークションで「かつおぶし削り器」を落札した・・・

(前書き)

どうも、k o m a - s h u n です。

今作「かつおぶしは厚めに削れ」でいよいよ、三作目となります。

前作「夜の雨と」、前々作「卯月の寒い深夜にて」とは少し路線を変えて、ハメを外してみました。そちらの方もよろしく願います。

それでは、「かつおぶしは厚めに削れ」をお楽しみください。

「かつおぶしは厚めに削れ」

- 1 -

立嶋えりは今朝届いた小包を開け始める。エアーの入ったビニール製の梱包材はいざというときのために折り畳み、キッチンの中に入れておいた。

小包の中身は、かつおぶし削り器だ。

えりが3日前、ネットオークションで粘りに粘って競り落としたものだ。えりの他にも「ねこまんま先輩」なるユーザーが最後までしつこく粘ってきたが、えりこと「襟そで大臣」はその戦いに勝利したのだった。とどめの倍アップが効いたようだ。やったぜ、自由経済主義。

そうして今、かつおぶし削り器はえりのもとにあるのだ。これは、削りがいがある。

そしてその、かつおぶしという名の「クラウン」を戴冠するのは、もちろん「B級グルメ界の王様」、「お好み焼き」だ。

「王様」はすでに、平皿という名の「玉座」に座っておられる。あとは、式典を待つばかりだ。「チャイム」という名の「祝砲」を。

「ピンポン」

さすが間のいい男、いや、旦那だ。

- 2 -

「ただいま」と言いながら、立嶋直志は上着を脱ぐとそれをえりに投げ渡した。

「ほら」

「ほい、つてこら、投げんじゃないわよ。ボタンとれたら、誰が直すと思ってるの」。

「いや、おれだけど」

「そうだね」と少ししよげるえりに直志は「いいよ、おれも悪かったし、これからはちゃんと優しく渡すよ」となるはずもなく、その後、30分ほど喧嘩は続いた。

「あーもういいよ、はい、めんごめん」

「お前、めんごってなあ」

直志が呆れていると、えりの右手にあるものに気付いた。

「えっちゃん、なんで、飽もってんの」

「あっ」

「王様」は玉座で冷え固まっていた。

- 3 -

えりは電子レンジに冷え固まった「王様」をつつこんだ。

「へえ、こんなのあるんだなあ」

直志がかつおぶし削り器を手に取り、関心しながら見ていた。

「ここをスライドさせると、この刃がさ、ほら、すごいでしょ」
「おお、すげえ、でどうなんの」

「えっ、かつおぶしの削る厚さが調整できるんだよ」

「ふーん、そんな機能いるかなあ」

「「いるかなあ」って、なおくんが言ったじゃない、「おれのお母さんのお好み焼きがそうだったから、かつおぶしは厚めに削れ」って」

鼻息まじりにえりがそう言っ、直志の顔を見る。

「お前、それ信じちゃったわけ。嘘にきまってんじゃない。ってかおれのお母さん、どんだけだよ」

「ふええ」

その後、電子レンジの中の王様が再び冷え切るのに十分な時間、ふたりは怒鳴りあっていた。

- 4 -

「あーもういいよ、おれが悪かった、はい、めんごめんご」

「あんだ、自分で言っちゃってんじゃない」

「えっ」

「とういか、もういい加減食べよう」と言う二人の利害が一致し、電子レンジで「王様」を再々加熱して、えりはその上に「クラウン」をかぶせ始めた。すると、1スライド目から、シュっとした削り節が出てきた。

「へえ、意外とすげなあ、削り器」

「えへ、すごいでしょ、削り器」

「うん、会社のやつに勧めてみるわ。ってかこれいくらしたの」

「えっと、16000円」

「はあ、16000円もする削り器を買ったわけ」

「だって、「ねこまんま先輩」があ」

「誰だよ」

「誰って、だからあ」

- 5 -

えりの「ねこまんま先輩」との戦いの話を止めさせた直志は

「もうわかったから、早く食べよう」

と降伏した。

再々加熱されたお好み焼きは思ったほど、おいしくないことはなかった。

「うん、むしろこの間より、上手いかも」

直志が驚いた顔でそう言うのと、

「えへ、やっぱり、これのおかげだね」

とえりは削り器にはおずりしながら答えた。

「お前なあ、あっほら、口にソースがついてるぞ」

直志はそう言うのと、体を起こし、えりの顔に近づいた。

「ちょっと、なおくん、何すんの」

頬を赤らめたえりは、直志を突き飛ばした。

「いや、だってソースが口に」

「だからって、なおくん、そんな急に……つく、ぷく、ぷはっあはは」

えりは思わず笑い出した。「ごめん、無理い」

「ぶあっあはは、えっちゃんそのキャラ最高すぎ。やばっ、涙でてきた」

- 6 -

「えっちゃん、また、お好み焼きつくってよ」

直志はクスリと笑い、そう言った。

「えっ、うん、わかった」

少し腑に落ちないえりの顔を見て、直志はへへっともう一度笑った。

「なおくん、どうしたの」

「えっ、ううん、なんでもない、ちゃんと作ってよ」

「わかってるよ、でも、なんか、もう1つ足りない気がするなあ。」

「そうか、結構うまいけど、でも、そうだなあ」

二人で箸をおいて、うんとうなっているとえりは顔をあげた。「なおくん、わかった」

「えっ、なになに」という直志の言葉を遮り、えりは冷蔵庫に駆け寄った。中を開け、「それ」を手に取ると、えりは直志のところへ向かい手渡した。

「はい、マヨネーズ」

(後書き)

ご通読ありがとうございました。

感想、ご指摘等ありましたらぜひ、お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8708t/>

かつおぶしは厚めに削れ

2011年10月9日06時36分発行